国土学事始め

大石久和
国土技術研究センター理事長

「比較学」の提唱

比較学、比較理解学とでもいうべきものを提唱したいと思います。何事も比較して理解しないと理解したことになりません。自分というものを自分は分かっているかというと、自分を見つめるだけでは分かりません。「自分以外の存在」つまり他人の存在があるから自分があるわけで、「自分は何か」は、他人のありようが分かって初めて分かるのです。背が高い・高くない、勉強ができる・できない、絵が巧い・巧くない、かけっこが速い・速くないなど、人を規定する形容詞は他人との比較で成り立つ言葉です。

地球人とか世界市民とかの概念も成立しないことになります。国家に閉じこもる時代ではない、地球市民として考えろ、と高説を述べる人がいますが、地球人以外の人類と具体的に比較できない以上、国籍を超えた市民という考え方は成立しないわけです。文明国だけが1人当たりCO_2をたくさん出せるのではなく、平均的に地球1人当たりでは、という言い方ができるのは当然で否定しませんが、比較して習えとかまねをしろ、というのでないことは理解いただけましょう。相対関係に置いてみないと、絶対すら理解につながらないという分かりにくい話なのです。

今の高校生は、日本史と世界史を分けて学びます。日本人2千年の経験を世界の人々の経験と比較して理解するのは不可能になっています。履修不足問題で明らかですが、日本史と世界史を共に選択履修するのは受験を考えると大きな負担で、最小の努力でできる限りいいと言われる大学に進学するには、まずい選択なのです。

日本の都市は西欧諸国とは成り立ちが異なります。西欧では「いざというときは城壁に閉じこもり市民として共同体を構成し、厳しく役割を分担して共に戦う。その覚悟のある者が安全な城壁の中に住むことができる。その代わりまとまって住むルール、例えば、皆で決めた計画に合致しない建築はできないことを受け入れた」人たちから成り立っていることを知る機会がないのです。市民運動などと気楽に市民という言葉を使いますが「覚悟して都市に住んだ市民がいたことは歴史上一度もない」ことを知らずに都市を議論しているのです。

スペインはこの25年間に高速道路を6・8倍に伸ばし1万3千㌔になりました。日本はこの間2・6倍、7千4百㌔で、すべて有料ですが、スペインは80%が無料の道路です。比較の一つとして知っていただければと思います。